

令和三年気良歌舞伎

仮名手本忠臣蔵九段目 山科閑居の場

配役

戸無瀬 となせ

かこがわほんぞう

加古川本蔵

おおほしゆらのすけ

大星由良之助

お石

おおほしりきや

大星力弥

小浪

りん

駕籠

駕籠

駕籠

山科閑居の場

「ひつたりて入りける、人の心の奥深き、山科の隠れ家を訪ねてここに来る人は

「加古川本蔵行国が女房戸無瀬 道の案内の乗り物を かたえに待たせ只一人

「刀脇差さすかげに 行儀乱さず庵の戸口

戸無瀬 頼みましょう、頼みましょう。

「という声に

りん どうれ。

「たすきはせずしてとんで出る、昔の奏者、今のりん

りん どなたさまでござりまする。

戸無瀬 大星由良之助さまお宅は、これかな。

りん ハイ、さようでござりまする。

戸無瀬 左様なら加古川本蔵が女房戸無瀬でござりまする。誠にそののちは打ち絶えました。チトお目にかかり

たき様子につき、はるばる参りましたと、伝えられて下さりませ。

りん 左様でござりまするか。また私は大星由良之助が女房お石・・・さまの召使いりと申します。只今

お取次ぎいたしますれば、しばらくお待ちくださりませ。

「言い入れされて表の方

戸無瀬 娘、娘。

「と呼び出せば

小浪 アイ。

「谷の戸明けてうぐいす鶯の梅見つけたるほほ笑顔まぶかに着たる帽子の内

小浪 アノ力りきや弥さまのお屋敷は、もうここかえ、わしや。

「恥ずかしいとなまめかし、取り散らしもの片づけて

りん どうぞお通りなされて下さりませ。

戸無瀬 左様なれば御免なされて下さりませ。

りん ハア。

(戸無瀬、小浪、内へ入る)

戸無瀬 駕籠のもの、皆かえれ。

三人 ハア。

(駕籠帰る)

戸無瀬 いざ御案内たのみまする。

りん ハア。

〽母に付き添い座に直れば、お石しとやかに出でむかい

(お石、上手ふすまから出る)

お石 これはこれはお二方とも、ようぞやお出で。とくよりお目にかかるはず、お聞きおよびの今の身の上、お訪ねにあずかり、お恥ずかしう存じまする。

戸無瀬 また改まったお言葉、お目にかかるは今日こんにちはじめなれど先立って御子息力弥殿に娘小浪を許婚いみなづけいたしたからは、お前なり私なり、あいやけ同士どし、その御遠慮には及ばぬ事。

お石 これはいたみ入ったる御挨拶、ことに御用繁しげき本蔵様の奥方、寒空といい思いがけなき御上京ごじょうきやう。戸無瀬様はともあれ、小浪御寮ごりやうさぞ都珍みやうしかろう。祇園清水知恩院ぎおんきよみずちおんいん、あの大仏様御覧ごらんじたか。金閣寺拝見なら、よいつてがあるぞえ。

〽心おきなき挨拶にただ

小浪 アイ。

〽あいも口の内、帽子まばゆき風情なり、戸無瀬は行儀あらためて

戸無瀬 今日参ること余の儀にあらず、これなる娘小浪、許婚いみなづけいたしてのち御主人塩冶殿不慮ふりよの儀につき、由良之助様、力弥殿、御在所ごにしろも定かならず、移り替わるは世の習い、変わらぬは親心とやかくと聞き合わせ、この山科やましなにござる由よし、承りましたゆえ、この方にも自分の娘、早うお渡し申したき、近頃押しつけがましいが、夫も参るはずなれど、出仕に暇のない身の上、この二腰ふたこしは夫が魂、これを差せばすなわち夫本

蔵が名代、ともう、私が役の二人前。由良之助様にも御意得まし、祝言させて落ち着きたい。幸い今は日柄もよし、御用意なされてくださりませ。

### 〽と相のぶる

お石　これはまた、思いも寄らぬ仰せ、折悪しゆう夫由良之助は他行。さりながら、もし宿におりまして、お目にかかり申そうなれば、御親切の段、千万かたじけのう存じます。マ許婚いたした折は、故殿様の御恩に預かり、御知行頂戴いたしまかりあるゆえ、本蔵様の娘御を貰いましょう、オオしからばくりよ うと言い約束は申したれども、只今は浪人。人づかいとてござらぬうちへ、いかに約束なればとて、大身の加古川殿の御息女、下世話に申す提灯に釣鐘、釣り合わぬは不縁のもと、ハテ結納をつかわしたと申すではなし、いずれへなりと外々へ、御遠慮のうつかわされませ、トサ申さるるでなござりませう。ママ、お煙草なりと。

### 〽聞いてはっと思いはながら

戸無瀬　アノお石様のおっしやる事わいのう。いかに卑下なさりようとして、本蔵と由良之助様、身上が釣り合わぬとな。左様なれば申しませう。手前の主人は小身ゆえ、家老を勤むる本蔵は五百石、塩治殿は大名、

御家老の由良之助様は千五百石、すりゃ千石違うをがてんご合点で、許婚はなされぬか、エ。只今ただいまにては御浪人ごろうにん。  
本蔵ちぎようが知行とは皆違ちじうてからが五百石。

お石 そのお言葉は違ちがいます。五百石はさておき、一万石違ちがうても、心と心が釣り合えば、いかに大身たいしんの娘でも嫁よめに取るまいものでもない。

戸無瀬 シ・・・こりや聞き所じやお石様。心と心が釣り合あわぬとおつしやるは、どの心じや、それ聞きまししようか。

お石 申しまましょうか。

戸無瀬 承うりまましょう。

お石 左様なれば申しまましょう。御主人ごしゆじん塩冶判官えんやはん様の御生害ごしようがい、御短慮ごたんりよとは言いながら、正直ちかを元とするお心こより起おこりし事。それに引き替かえ師直もろのうに、金銀きんぎんをもつて媚こびへつらう追従ついで武士ぶしの禄ろくを取とる本蔵殿ほんざうと、二君にきみに仕つかえぬ由良之助ゆらぎすけが大事だいじの子こに釣つり合あわぬ女房にようばうは持もたせられませぬ。

聞ききもあえず、膝ひざ立て直ただし

戸無瀬 ヤアへつらい武士ぶしとは誰たが事こと。様子ようすによつては聞きき捨すてられぬ。

「そこをゆるすが娘の可愛さ」

戸無瀬 夫に負けるは女房の常。しゅうげん 祝言あろうが、あるまいが、いいなすけ 許婚あるからは、天下晴れて力弥が女房。

お石 こりや面白い。女房なれば夫が去る。力弥に代わってこの母が、去った去った、去りました。

「言いはなし。心へだての唐紙を、はたと引き立て入りにける」

(お石、小浪を振り払い上手へ入る)

「娘はわっと泣きいだし」

小浪 せつかく 折角思い思われて、いいなすけ 許婚した力弥さまに、逢わせてやろとのお言葉を、たよりに思うて来たものを。ア

ノ姑 しゅうとめい 御の胴欲にも、わしゃ去られる覚えは無い。はわさま 母様、どうぞ詫び言して、しゅうげん 祝言させてくださりませ。

「すがり嘆けば母親は、娘の顔をつくづくと打ち眺め打ち眺め」

戸無瀬 親の欲目か知らねども、ほんにそなたの器量なら、じゅうにん 十人並みにも優った娘。まさ よい婿がなと詮議して、

いいなすけ 許婚した力弥殿、たずねて来た甲斐も無う、むこ 婿にも知らさず去ったとは、義理にも言われぬお石様。

「姑去りは心得ぬ」

戸無瀬 うとく ンさては。浪人の身の寄るべ無う、筋目を言い立て有得な町人の婿になって、むこ 義理も法もこりや忘れた

なあ。コレ小浪、今聞くとおりの男の性根しやうね、去つたと言うを面当つらあて、欲しがる所は山々やまやまある、欲しがる所は山々やまやま。ほかへ嫁入りする気は無いか。これ、これ小浪、大事なところじゃ、泣かずともしつかりと返事しや。ママどうじゃぞいの。

〽尋ねる親の気は張弓はりゆみ

小浪 アノ母様の、胸欲むちよくなことをおっしゃります。国を出るとき、父様のおっしゃったは、浪人しても大星力弥、行儀ぎようぎといい器量きりようといい、仕合わせしあな婿むこを取った。

〽貞女ていじりようふ両夫にまみえず

小浪 アー。

〽たとえ夫に別れても、またの殿御とのごを設けなよ。主ぬしある女の不義同然

小浪 必ず必ず寝覚めにも。

〽殿御大事を忘るるな。由良之助殿夫婦の衆へ孝行つくし、夫婦仲

小浪 睦まじいとて、あじやらにも

〽恪気りんきばしして

小浪 アー。

戸無瀬 コレ。

「去らるるな

小浪 案じようかとして隠さずに、身重になったら早速に、知らせてくれとおっしゃったを、わしやよう覚えて  
いる。去られていんで父様に、苦に苦をかけてどう言うて、どう言い訳があるうとも、力弥様よりほか  
の殿御は、わしや、いやいや。

「いやいやいやと一筋に、恋を立て抜く心根を、聞くにたえかね母親の、涙一途に突き詰めし、覚悟の刀とりな  
おせば

戸無瀬 そうじゃ。

小浪 母様、こりや何事か。

戸無瀬 何事とは、何事とは、何事とは曲がないわいのう。今もそなたの言うとおりに、一時も早う祝言させ、初孫  
の顔見たいと、コレ娘に甘いは父の習い。悦んでござる中へ、まだ祝言もせぬ先に、去られて戻りまし  
たとて、どうまあ連れていなりようぞ。と言うて先が合点せにや。仕様もようも無いわいなあ。まして

そなたは先妻せんさいの子、わしとはなさぬ仲ゆえに、よそにしたかと思われては、どうも生きてはいられぬ義理。このとおり死んだ後で、父御ていごへ言い訳したもや。娘さらばじゃ。

小浪 はわさまアノ母様のもつたいない事おっしゃります。殿御とのごに嫌われ、私こそ死すべきはず。母様のお手にかけて、私を殺してくださいませ。去られても殿御とのごのうち。

〽ここで死ぬれば本望じゃ

小浪 早う殺してくださいませ。

戸無瀬 おお、よう言うた。よう言うた……。でかしゃった、でかしゃった、でかしゃったよのう。そなたばかり殺しはせぬ。この母も三途ともの供、そなたをわしが手にかけて、母もおっつけ後から行く。娘、覚悟はよいか。

〽立派にも、涙をとめて立ちかかり

(尺八の音。兩人、階段おり、いろいろとこなしあつて)

戸無瀬 コレ娘、あれを聞きや。表には虚無僧こむそうの尺八、鶴つるの巢籠すごもり。

〽鳥類でさえ子を思うに、とがも無い子を手に掛けるは、

戸無瀬 母も因果。

小 浪 わたしも因果。

戸無瀬 因果同士の。

両 人 寄りあいじゃなあ。

〴〵と思えば足も立ちかねて、ふるうこぶしをようように、振りあぐる刃の下、尋常に座を占め手を合わせ

戸無瀬 娘、覚悟はよいか。

小 浪 南無阿弥陀仏。

戸無瀬 南無阿弥陀仏。

〴〵と唱うるうちより

お 石 御無用。

〴〵と声かけられて思わずも、たるみしこぶし尺八も、ともにひっそとしまりしが

戸無瀬 今御無用とどめしは、こむそ虚無僧の尺八よな。助けたい助けたいが山々で、やまやま無用と言うに気おくれし、未

練など笑われな。娘、覚悟はよいか。

「また振りあぐる、また吹きいだす、とたんの拍子に

お 石 ごむよう 御無用。

戸無瀬 また御無用ととどめしは、こむそう 虚無僧の尺八か、ただしまた、こう振り上げた刀の手の内か。

お 石 そのお刀の手のうち御無用。ごむよう せがれ力弥と祝言さしよう。

戸無瀬 そういうお声はお石様、そりやまあまことか、誠でござりまするか。

「尋ねるふすまの内よりも

お 石 逢いに相生の松こそめでたかりけれ

戸無瀬 娘、コレ娘、祝言じゃ・・・コレ娘、祝言じゃといのう。

(いろいろとこなしあつて)

「祝儀の小謡、白木の小四方、目八分にたずさえいで

お 石 義理ある中の一人娘、殺そうとまで思いつめた戸無瀬様の心底、しんてい 小浪殿の貞女、ていじよ その志がいとおしき。

させにくい祝言さすその代わりに、世の常ならぬ嫁の盃、さかずき 受け取るはこの三宝、さんぼう 御用意あらば。ごようい

「と差し置けば、少しは心休まりて

戸無瀬 世の常ならぬ盃とは、引出物の御所望ならん。しばらく。この二腰は夫が重大、刀は正宗、指添は浪の平行安、家にも身にも換えぬ重宝、これを引出に。

〽と皆まで言わさず

お石 ヤア浪人の身とあなどって価の高いこの二腰、まさかの時に売り払えと言わぬばかりの婿引出、御所望申すはこれではない。

戸無瀬 ハイハイ……。そうして何が御所望ぞ。

お石 サアこの三宝へは、そなたの夫本蔵殿のお首がのせて貰いたい。

戸無瀬 エエそりやまた何のお恨みで。

お石 さればいなあ、御主人塩冶判官様、高師直にお恨みあつて、殿中にてただひと刀に切りかけ給う。その時にそなたの夫本蔵殿、その座にあつて抱きとめ、殿をささえたばかりに、御本望も遂げ給わず。かたきはようよう薄手ばかり。殿にはやみやみ御切腹。口へこそ出し給わねど、その時の御無念は、本蔵殿に憎しみがかかるまいか、あるまいか。家来の身としてその加古川が娘、あんかんと女房に持つような力弥じやと申うての祝言なれば、この三宝へ本蔵殿の白髪首。サイやとあらばどなたでも、首を並ぶ

る尉じょうと母うば。それ見たうえで祝言さしよう。

戸無瀬 サアそれは。

お石 いやか。

戸無瀬 サアそれは。

お石 応か。

両人 サアサアサア・・・。

お石 ご返答が承りたい。

ゝするどき言葉の理屈づめ、親子ははっと差しうつむき、途方に暮れし折からに

本蔵 加古川本蔵が首、進上申す。イザお受け取りなされ。

ゝ表に控えし虚無僧の、笠脱ぎ捨てて、しずしずと内へ入れば

小浪 ヤアお前は父様。

戸無瀬 本蔵殿、ここへはどうして、このなりは。

本蔵 ヤアざわざわと見苦しい。始終の仔細皆聞いた。そち達に知らせず、ここへ来た様子は追って。まあ黙

れ。

(本蔵、うちへ入り、みづくろいする)

〽身をつくろい、お石に向かい

本蔵 そこもとが由良之助殿の御内証お石殿よな。今日の仕儀かくあらんと存ぜしゆえ、妻子にも知らせず、

様子うかがう加古川本蔵、案に違わず拙者が首、婿引出に欲しいとな。ハハハ・・・、いやはやそりや、

侍の言うことだ。主人のあだを報わんという所存もなく、遊興にふけ、大酒に性根を乱し、放埒なる身

持ち、日本一の阿呆の鑑だ。

(戸無瀬、袖を引く)

本蔵 よいわ、よいわ。うっちゃっておけと申すに。蛙の子は蛙になると、親にも劣らぬ力弥めが大たわけ。

(小浪、袖を引く)

本蔵 よいというに。うろたえ武士のなまくら刃金、この本蔵が首は切れぬ。ば、ば、ば、馬鹿尽くすな。

〽と踏み砕く

本蔵 やれ三宝のふち放され、こっちから婿には取らぬ。ちよございな女め。

「言われせも果てず」

お石 ヤア過言かごんなり本蔵、浪人の身の錆刀さびがたな、切れるか切れぬか塩梅あんばいみしよう。不肖ふしようながら由良之助が女房、望む相手じゃ。勝負勝負。

「裾引き上げ、長押ながしにかけたる槍おっとり、突っかからんずその気色、これは短気、まあ待ってと、とどめへだつる女房娘、邪魔ひろぐなどあらけなく、右へ左へ引きのくる、槍の塩首ひつつかむ、刃棟を蹴って蹴あぐれば、槍をもがれても走り寄る、膝こぶしに引っ敷く強気の本蔵、

本蔵 であえ、であえ。

「かけ出る大星力弥、捨てたる槍を取る手も見せず、本蔵が右手のあばら、左手へ通れと突きとおす。うんとばかりにかっぱと伏す

力弥 いっそとどめを。

「ととりなおす

由良 やれ待て力弥、早まるな。

「槍引き留めて由良之助、手負いに向かい

由良 一別いちべつ以来、珍しや本蔵殿。御計略ごけいりやくの念願届き、媚力むじ弥が手にかかり、さぞ御本望ごほんもうでござろうのう。

〽星を指いたる大星が、ことばに本蔵目を見開き

本蔵 主人のうっぷんを晴らさんと、この程よりの心遣い、遊所の出合いに気をゆるませ、と、徒党の人数は揃そろいつらん。

由良 なんと。

本蔵 思えば貴殿の身の上は、この本蔵が身にあるべきはず。当春鶴とうはるヶ岡造営のみぎり、主人桃井若狭之助もものい、

高師直に恥じしめられ、もつてのほかの憤り。それがしを密かに召され、まずこうこうとの物語、明日みょうにった

御殿にて出くわし、一ト刀にて討ちとめんと思いつめたる御顔色ごがんしよく。とめてもとまらぬ若氣の短慮。小身

ゆえに師直に、賄賂まいない薄きを根にもつて、恥じしめたと知つたるゆえ、主人にも知らせず不相応なる金

銀衣服台の物、師直に持参なし、心に染まぬへつらいも、主人を大事と存ずるゆえ。賄賂まいないおおせあつち

から、謝って出たゆえに、切るに切られぬ拍子抜け、主人の恨みもさらりと晴れ。

〽相手代わって塩冶殿、難儀となつたはすなわちその日

本蔵 相手が死せずば切腹にも及ぶまじと、抱き止めたるは、思い過ごせし本蔵が一生の誤り。娘が難儀とコ

レ白髪のこの首、婿殿へ。

メ進ぜたさ

本 蔵 女房娘を先にのぼし、媚びへつらいしを身のとがに、お暇を願うてな、道を変えてそち達より二日前に京へ入り、若い折の遊芸ゆうげいが、役に立った四日のうち、貴殿の性根を見抜きし本蔵、手にかかれば恨みも晴れ、約束通りこの娘、力弥に添わせて下さらば、未来永劫御恩みらいよせうは忘れぬ。これ、手を合わせて頼み入る。忠義ならでは捨てぬ命、子ゆえに捨つる親心、コレ推量あれよ由良殿。

メ言つも涙にむせ返れば、妻や娘はあるにもあられず

戸無瀬 そのお心とは露知らず、死におくれたばかりに、お命捨つるはあんまりな。

小 浪 冥加みよがのほどが恐ろしい。

戸無瀬 おゆるしなされて。

両 人 くださりませ。

メかっぱと伏して泣き叫ぶ、親子が心思いやり、大星親子三人も、ともにしおれていたりしが

由 良 イヤナ二本蔵殿、君子はその罪を憎み、その人を憎まずと、縁は縁、恨みは恨みと格別の沙汰もあるべ

きにと、さぞお恨みに申されんが、所詮この世を去る人、底意を明けて見せ申さん。ソレ、力弥。

〽未然を察して奥庭の、障子さらりと引き明くれば、雪をつかねて石塔の、五輪の形を二つまで、造り立てしは大星が、成りゆく果てをあらわせり。戸無瀬はさこしく。

戸無瀬　ご主人のあだを討つてのち、二君に仕えず消ゆると言うお心のあれあの雪。力弥さまもお心で、娘を去ったの胸欲は、御不憫余つてのお心ざし、恨んだわたしが恥ずかしい。

お石　アレ戸無瀬様のおつしやることは、玉椿の八千代までも添い遂げられず、後家になる、それを承知で嫁にとる、このようなめでたい悲しいことはない。果報つたなき。

両人　うまれじゃなあ。

〽声も涙にせきあぐる。本蔵あつき涙をおさえ

本蔵　アア嬉しや喜ばしや。忠臣の鑑とは唐土もろこしの予讓よじょう、日本の大星。昔より今に至るまで、唐からと日本にたんだ二人、その一人を親いちにんにもつ、力弥が妻となつたるは武士の娘の手柄者、手柄な娘が婿殿へ、お引きの目録進上申す。

〽懐中より取りいだすを、力弥取つて押しいただき、ひらき見ればこはいかに、目録ならぬ師直が、屋敷の案内

いちいちに、玄関、長屋、侍部屋、水門、物置、柴部屋まで、絵図にくわしく書きつけたり、由良之助はつと押しただき

由良 有り難しかたじけなし。徒党の人数はそろえども、敵地の案内知れざるゆえ、発足も延引せり。この絵

図こそは孫呉が秘書、我がための六韜りくとうさんりやく三略。かねて夜討と定めれば

力弥 継ぎ梯子にて塀を越え。

由良 忍び入るには縁側の。

力弥 雨戸はずせばすぐに居間、ここを仕切つて。

由良 待て待て。こう、こう攻めて。

へと親子がよろこび、手負いながらもぬからぬ本蔵

本蔵 イヤイヤそれは僻事ひがごとなり。用心厳しき高師直、障子襖は皆尻ざし、雨戸あいせんに合栓合くろろ。こじても外れず、かけ矢にてこぼたば音して用意せん。サ、サ、サササこれいかに。

由良 オオそれにこそ手立てあり。凝つては思案にあたわずと、遊所ゆうしょよりの帰るさ、思いついたる前裁せんざいの雪待ち竹、雨戸を外すわが工夫、仕様をここにて見せ申さん。それ力弥。

「庭におりしも雪深く。さしにも強き大竹も、雪の重さにひいわりと、しわりし竹を引き回して鴨居にはめ力 弥 これ、これこのごとく弓をこしらえ弦を張り、鴨居と敷居にはめおきて、一度に切ってはなつ時は。

「まっこのようにと積もつたる枝打ち払えば、雪散って伸びるはすぐなる竹の力、鴨居たわんで溝はずれ、障子残らずばたばたばた、本蔵苦しさうち忘れ

本 蔵 ハハア、したりしたり。計略といい、義心といい、かほどの家来を持ちながら、まだ分別もあるべきに。

### 「浅き工の塩冶殿

本 蔵 今日の忠義を戦場の。

由 良 御馬先にて尽くしなば。

本 蔵 由良どの。

由 良 本蔵どの。

本 蔵 ぜひもなき世の。

両 人 ありさまじゃなあ。

「思えば無念と閉じふさがる胸は七重の問の戸を漏るるは涙ばかりなり。力弥はしずしずと父が前に手をつかえ

力 弥 本蔵殿の寸志にて、敵地てきちの案内知れたるうえは、泉州堺あまがわやの天川屋義平方へ通達し、荷物の工面つかまつらん。

由 良 何さ何さ。山科やましなにあること隠れなき由良之助。人数を集めば人目にたつ。これより堺へ立ち帰り、あれからすぐに発足せん。その方は母、嫁、戸無瀬殿もろともに、あとの片づけ諸事万事、心残りの無き様に、な。あすの夜舟でくだるべし。我は幸い本蔵殿の、忍び姿を我が姿に。

〽袈裟うちかけて編み笠に、恩をいただく報謝返し、未来の迷い晴らさんため

由 良 今宵こよいひとよ一夜は嫁御寮よめごりょうに、舅が情けの。

〽恋慕ながし歌口しめして立ちいずれば、かねて覚悟のお石がなげき

お 石 どうぞめでとう、御本望を。

〽とばかりにて、名残り惜しさの山々を、言わぬ心のいじらしさ。手負いは今を知死期時

由 良 これぞ尺八煩惱の。

お 石 枕ならぶる追善供養。

戸無瀬 ねやの契りは。

由良 一ト夜ぎり。

ハ心残して

(幕)